

書評

Rudolf Laun, *Der Satz vom Grunde*, 1956.

高根義三郎

ラウンは一九四二年春に『根拠律』を公にした。これは、ラウンの法律学の根拠となる哲学である。初版は出版後、約一年で売り切れ、一九五六年に再版がでた。再版には一七ページのあとがきが追補された。この三三七ページの書物のはじめに約一〇ページの序説(Entfaltung)がのっている。この序説はラウンの哲学のなかで一番重要な説明である。私は、一九六六年四月二〇日、アーレンスブルグ・ホルシュタインにラウンを訪ねたが、その際、ラウンからこの序説を日本語に訳すようにたのまれた。これがその訳である。ラウンについては昭和四一年四月号の『一橋論叢』に人物評論を書いた。同じ年の九月一日号の『判例時報』にラウンの訪問記がのっている。

ルドルフ・ラウン『根拠律』序説

この研究の方法上の出発点は、この序説のなかにはなくて、

第一章のなかにある。ここでは、この書物がどういう精神で、そしてまた、どういう目的で書かれたか、読者に簡単に知らせたいと思う。

すべての哲学は、すべての学問上の研究と同じように、真理に仕え、そして真理だけに、すなわち、主観的な要求とカ利益とかにとんちやくしないで、必然的に不可避的にすべての人に妥当することだけに、仕えるのである。哲学が個々の諸科学と区別されるのは、哲学が今までの経験では証明できない仮説までも考慮するからであり、宗教や神秘主義、迷信、素朴なしろうとの思弁とちがうのは、哲学がそのような仮説を確実な知識と同じと見ず、またはそれよりも高く見ず、むしろ仮説を経験によって検査し、これが個々の諸科学の確実化された成果と矛盾するときには、容赦なく拒絶するからである。

哲学がこのような任務を果たすときには、哲学はすべての学問と同じように、真理だけに仕えるのではなくて、実際にこの世の中に在る測り知れない大きな不幸をやわらげ、不幸にくらべてずっと少ししかない幸福をふやすための武器を、人の手に渡すのである。

しかし、哲学者が自分の知識欲を満すばかりでなく、自己をはなれてすべての人々の幸福のために活動しようとするれば、哲学者は直ちに、人類に与えられている最高のもの、すなわち、善の理念に近づく。

真理についての知識、また善についての知識は、認識を前提とする。それ故に、認識論が哲学の基礎でなければならぬ。

しかし、認識の問題そのものが、我々の認識に大変な困難を持ちこむのである。

ヒュームがカントの「独断的なまどろみ」をさました後に、カントは、哲学を認識問題から革命した結論に達した。しかし、いかなる革命も、新しいものを一挙に古いものと素早く代えることはできなかった。それは、たとえ最もすぐれた人であっても、たった一人の人の精神力でできることではない。革命はどれも、はじめ取った方向に前進したり、あまりすすみすぎた過激主義からあと戻りしたり、他の方向へ進んだりなどして、発展する。ヴントが、個人における「目的の変生」(Heterogenie der Zwecke) についで説いたことは、比喩的に、どの全体としての精神運動について、言えるだろう。すなわち、到達した目的が、はじめの動機を越えてしまうのである。ヒュームとカントとは、革命をはじめた。この書物は、この革命を完成するための一つの礎石を提供しようとするのである。

カントは、純粹理性批判の第二版の序言で、次のように言っている。「我々はこれまで、我々の認識はすべて対象に従って規定されねばならないと考えていた。しかし、我々が対象をア・プリオリに概念によって規定し、こうして我々の認識を拡張しようとする試みは、すべて、こういう前提の下では、潰え去ったのである。そこで今度は、対象が我々の認識に従って規定されねばならないというふうに想定したり、形而上学のいろいろの課題がもっとうまく解決されはしないかどうかを、ひとつ試みてみたらどうだろう……。」

けれども、この最後の文章に、すべてを根本的に変える六つの言葉を挿入しなければならない。すなわち、「我々の認識の(unserer Erkenntnis) 対象は我々の認識に従って規定されねばならない」のである。これに反して、対象すなわち実在世界の(der realen Welt) 問題は、この立場の変更に全く関係がない。我々の認識も、それが単なる夢でないならば、実在世界の一部である。(Zu dieser gehört auch unser Erkenntnis, wenn es mehr als ein blosser Traum sein soll.)

ひとは、ここにのべた思想を、カント自身があげている例で言い表わすこともできる。カントは続けてこう言っている。「この事情は、コペルニクスの主要な思想とまったく同じことである。コペルニクスは、すべての天体が観察者のまわりをまわるといふふう想定すると、天体の運動の説明がなかなかうまく運ばなかったため、今度は天体を静止させ、その周囲を観察者にまわらせたらもっとうまくいきはしないかと思つて、このことを試みたのである。」この場合も、少し付け加えなければならぬ。すなわち、観察者は天体から独立してまわるのではなくて、天体の法則に従つて(nach den Gesetzen der Sterne)まわるのである。この天体の法則は、しかし、実在世界の法則である。

このように、認識機能のために実在世界を王座から退けることは、革命への第一歩にすぎなかった。革命の第二歩は、認識論上の変革の成果にもかかわらず、認識の法則を実在世界の法則と解する(die Gesetze der Erkenntnis als Gesetze der

realen Welt zu begreifen) ことである。言い換えれば、観察者と天体との双方を動かす法則を検討し、それをすべての他の思考の基礎とすることであり、実在世界と認識との双方に共通な領域をさがし求めることである。このことを以下に試みようと思う。

近代の哲学は、認識と実在世界との間の分裂によって引きこまれた。経験論と理性論とを和解させるために出発したカントは、上に述べた立場の転回で、この裂け目をうめないうで、かえって深めた。若し、その裂け目を少なくとも我々の体験の一部分について解消し、認識の法則と実在世界の法則とが同一であることを示すことができたならば、従来の哲学のようにはこの分裂になやまされない一つの新しい実質哲学を築くことができる基礎が、得られるだろう。認識論上の議論が基礎的であり必然的であって、それらを顧みない人々がいざれも、徹底的な研究者とはいえず、現在これらの議論は重んぜられていない。ひとは、認識論すなわち認識批判だけで、実質上の問題を解くことはできない。それ故に、認識論上の議論が肥大したことによって哲学は信用を失うこととなった。そして、沢山のすぐれた思想家は、哲学の思惟からはなれたか、または認識問題から上にできることができなかった。この二つの場合とも、これらの思想家は、人間の思考が努力する主要問題、すなわち実質哲学の大問題、から遠ざかってしまったのである。

実質哲学は、個々の諸科学を互に結び精神上のひととなるべきである。それは、個々の諸科学の成果を孤立から引きはな

し、他の領域の役に立つようにすべきである。実質哲学は、その研究衝動と仮説とをもって、個々の諸科学の力がやむところまで達すべきである。しかし、何よりも、この実質哲学には、人間が最も聖なるものと見なすもの、すなわち、道徳上の価値と善の理念がまかされている。

それ故に、ひとは、次のように思うかもしれない。「人々は畏敬の念をもって哲学を仰ぎ見る。すべての文明国民の精神上の上層の人々は、熱望して哲学上の問題に取り組む。哲学に必要な才能や予備教育を受けることのできなかつた何百万という人々は、少なくとも大衆的な講演へ押し寄せ、哲学の問題についての平易な書物を争って手に入れようとする。何百万という人々が、数百の競りあう宗教も常に必ずしも与えない慰めを哲学上の思想に求める。殊に同じ宗教が戦争のときに双方の側に武器をさすけたり、社会上の闘争のときに双方の陣営に立ち上る場合は尚更である。」

しかし実際はそうではなくて、哲学は現代の明らかなまま子である。ユーベルウェークの『哲学史綱要』第四部は第七章に「(一八七〇年以後の) 哲学の再興」という標題をつけている。しかし、そこでいう発展は狭い範囲にだけあったので、個々の諸科学の代表者の大多数とそれよりも多い大衆とは、この「再興」とほとんど無関係であった。若し今日一人の新しいプラトンとかアリストテレスとかカントとかが、偉大な書物を公にしても、その書物の存在を、数百人の教授のほかには、精々、数千人の学生と数千人のそのほかの哲学に興味を持つ読者とが注

意するだけであって、そのほかの何億という文明人にとって
は、この書物は、世の中に存在しないこととなる。

これに反して、拳闘選手とか映画スターとか職業政治家とか
の名声は、ばく大な費用をかけて、毎日何万という新聞とラジ
オ・ニュースで、何千万の人々の頭に叩きこまれる。この賛美
を受ける人々の超人的な偉大さを何千万の人が信ずるまでそう
されるのである。

それどころか、もっとひどいことがある。上に述べた新しい
アリストテレスまたカントは、若し幸運にも印刷費用を自分で
支払うことができるのでなければ、その最良の著作さえも公に
することが多分できないだろう。若しひとが新しい国家篇、オ
ルガン、形而上学また純粹理性批判を、出版者自身の商業上
の危険で公にするように、数ある出版者の一人に提案したとす
るならば、その出版者はそのような理論的な書物が売れるとは
考えられない、と答えるだろう。そして、その答えは商業的に
は正しい答えである。しかし、極めてつまらぬ事からについて
は、毎年ばく大な数の書物が印刷されるのである。これらの書
物は僅かのものを除いて、永久に忘れられる。

我々は、哲学が昔持っていた大きい人望と大きい影響力と
を、恥ずかしいといいたいほど失ったことを否定することがで
きない。若しギリシャ人の精神生活からプラトンとアリストテ
レスとを除き、中世後期の精神生活からアリストテレスを除
き、一六世紀から一八世紀の精神生活からそれぞれの世紀の大
哲学者達を除いて見よう。そうすれば大きな空白ができるだろ

う。歴史の全部に混乱が生れるだろう。そこで、今日の哲学を
現代から除いて見よう。どんなことが起るだろうか。何も起ら
ないのである。一千人の教養ある人々のうち九百九十九人は、
何も気がつかないだろう。

我々は、なぜこうなったか、明らかにしよう。

主な原因は、社会の階層が変化したからであるかもしれない。
一人の大思想家が一つの精神上の強国であった時代では、
精神上の興味を代表する人々と政治史を代表する人々は、数か
らいて全く小さい階層であった。そして、ここでは、精神上
の教養と政治上の権力とは、その大部分が一つになっていた。
その後、大衆が、しばしば政治上のでき事に興味をもった。こ
の興味は新聞の読者であったりラジオの聴取者であったりして
受け身に限られている場合でも、大衆は権力者が自分の側につ
けようとする世論のおもだった要素である。そして、新聞やラ
ジオ、そのほか諸国民の精神生活上いろいろなこと、まず第
一に大衆の趣味と理解とによって形づくられねばならない。し
かし、残念なことには、精神上の向上は、社会上の向上と同じ
歩調をとることができなかった。そこで、思想家は、強国の地
位を政治上の演説家、映画俳優、また、スポーツマンにゆずっ
た。そして、フットボールの大試合は、すべての国々の現存の
大哲学者が数週間も重大問題を論ずる会議よりも、千倍も強い
反響をよぶのである。

このように、大衆の精神上の向上が社会上の向上よりもおこ
れていることについて、学問がどの程度共同責任があるか、

ということ、今ここでは問題としない。いずれにしても、問題は、真と善に仕えようとするかぎり、大衆の精神上的の向上のための、また、大衆の白痴化のための戦いで、全力をあげて精神的の向上につくすことに、最大の関心を持っている。将来の哲学は再び、歴史を作るすべての人に訴えなければならぬだろう。しかし、その場合、歴史をつくる人とは、もはや少数の上層社会ではなくて、あらゆる階層のうちのすぐれた者または能力ある者の選り抜きだろう。そこで、この書物も、学問が用いる「学者的な」(Gelehrten)言葉を使っているが、適当な言葉に変えれば、ギリシャ語、ラテン語、また、カントやヘーゲルの使った言いまわしを理解できないし、また、数学論理学の象形文字に熟達できない人々にも、その結果がわかるように考えて書いたのである。

しかし、社会階層が変化したということは、哲学の評価が没落したことを許す口実として十分でない。というのは、その予備教育の点からも能力の点からも、或る程度或る範囲、哲学にたずさわることのできる上層社会層の人々も、その圧倒的多数が哲学を研究しないからである。同じことが個々の諸科学の代表者の圧倒的多数についてもいえる。我々が判断できる範囲では、昔はこうではなかった。とにかく、今日は様子が変わったのかもしれない。すなわち、大多数の教養ある人々、いな、個々の諸科学の大多数の代表者さえ、哲学に冷淡でいるのは、現代の哲学に内的な原因があるにちがいない。

実際、最近の二、三世代の実質哲学は、広い範囲の人々の共

感と興味をひくことのできるほどの業績を、汎山示すことができなかつた。

一方には、ヒュームとカントによって独断的なまどろみからさまされなかつた人々、または完全にはさまされなかつた人々、または改めて眠りこんでしまった人々、簡単にいえば、認識問題をかえりみなかったり第二義的と見る人々がいる。これらの人々は主として、経験論から哲学的実証主義へ、幾分は、形而上学的唯物論へともって行かれたし、今後ももって行かれるだろう。これは、個々の諸科学が数学に、そして、自然の領域と文化の領域での事実と因果関係の精密な研究を基礎にするかぎり、個々の諸科学の大きい勝利をさまたげない。しかし、そうすると、倫理問題を軽んじて現実科学を一方的に奨励することになり、また現実科学を誰もが全体を見わたすことのできないようなせまく限られた方面にますます特殊化し引き裂くようになる。

広い特殊化は、学的な良心と徹底性との命令によって生じたのであって、これを動かすことは許されない。しかし、学的な良心と徹底性とは、我々が我々の認識の基礎について心をいためるようにも要求する。認識論のほかにも、共通に学的な興味をひく部門がある。多数の専門に深く通じることは、人生が短いのでできない。しかし、このことは、大部分の人が今日しているように、各人が自分の専門だけに限って、すべての人々に共通な根本問題について (allien gemeinsamen Grundfragen) 何一つ知ろうとしないことを、少しも許すものではない。しか

し、すべての人々に共通な根本問題こそ哲学の対象である。若し、すべての人々が共通な根本問題を無視するならば、人間の知識は数百の、二、三世代後には数千の、こなごなの互につながらのない専門から成り立つことになる。第一の人は天体運動の理論にだけくわしく、第二の人はエジプト王朝の歴史にだけくわしく、また第三の人は脳病の病理にだけくわしい、などということになる。この場合、我々は諸々の部分をつかんでいる。しかし、残念なことは、精神上のつながりが欠けている。そうすると、全体としての人類は、全体としての真と善とを求める戦いで見捨てられてしまう。このことが殊に倫理上のまた政治上の問題で、ますますその結果をあらわしていることを、我々は今日既に見ることが出来る。

医学、工学またその他の学問が経験論と特殊化とによってすばらしい進歩を遂げたことを尊重するが、学問の限りなく広がる細分化と寸断化とに対しては、対抗手段をとらなければならぬ。それ故に、学問に興味をもつ人すべてに対して、哲学に帰れ (Zurück zur Philosophie!) と呼びかけねばならない。もちろん、学問をしている人が誰でも、創造的な研究で哲学上の文献を豊富にするほどの愛着と時間と苦心と天分とを哲学にそそぐことはできない。しかし、文献が量的に多くなることは、大多数の専門でもそうであるように、哲学にあっても得ようと努力する値うちのあることではない。すべての人々に必要なことは、哲学に対する興味と哲学を受け入れるばかりではあるが研究することである。そうすれば、個々の諸科学の間の

結びつきは、おのずからでてくるだろう。我々が一般に、興味を持つほとんどすべての部門で、自分の専門を除いて、永久にしろとうにすぎないということ認めなければならぬが、すべての人に関する、そして我々の専門にも関する根本問題では、我々はしろとうであってはならぬ。(so dürfen wir es doch nicht in jenen Grundfragen sein, die alle und damit auch unser eigenes Spezialgebiet angehen.)

経験論と哲学的実証主義とに反対する人々のなかには、カントの「コペルニクス的」転回に、明らかにまた徹底的に従う思想家、またはこの転回の影響を受けた思想家がいる。疑いもなくこの方面から、哲学のために大変価値のあるものが供給された。しかし、カント以後の認識批判による実質哲学は、対になっている二つの危険の間を通り抜ける完全で明白な道を見いだすことができなかった。

一方の人々は、カントのした立場の転回を、意識的また無意識的に、徹底的に気にする。そして、これらの人々にとって、観察者をめぐる實在世界は、観察者の認識機能に従って回転するばかりでなく、観察者の希望に従って回転する。かくて、ヘーゲルの思想の飛躍は、極右の保守的帝国主義にとっても、極左の唯物史観にとっても、基礎となることができた。ひとは、このような発展が、個々の諸科学の代表者において、また一般に世論において、哲学に対する尊敬を特に高めると見ることはできない。しかし、ひとがひと度實在世界を認識者の主観的機能に余すことなく依存させてしまうと、感情的認識内容を、感

情的でない認識内容から区別することは、非常に困難である。それ故に、カントの転回、実質哲学で、誤解と悪用とをどきさなかつたばかりでなく、前よりも広くそれに戸を開けてしまつたのである。

このように、一方の人々が、認識問題を軽んずる危険に、従つて、主観主義の危険におちたのに対して、他方の人々は、形式的なもの、すなわち、論理学と認識論とを、力説することによつて、この危険を逃れようとする。人々は退いて、「純粋な」科学にたてこもる。かくて、ひとは、「純粋な」倫理学、美学、法学、国家学、社会経済学また「純粋」科学の他の部門で、各種の主観に制約された価値判断に対して、普遍妥当の知識を、対決させようとする。しかし、形式的な思想操作に限定すれば、ひとは実質問題に近づくことはできない。認識は、ある物(Objekt)が認識されるときにかぎつて意味を持つのである。しかし、このある物とは、実質のある素材であつて、従つて、どのような認識でも既に与えられ前提されなければならない。従つて、形式的なまた「純粋な」学問では、ひとは、既に与えられ前提される実質のある素材を単に論理的に変形することよりも上に出ることはできない。すなわち、ひとは、実質知識について前進する見込みもなく、この知識の周辺で常に立ち往生する。

そこで、純粹倫理学は機智に富んだものでも、本当に「純粹」であろうとするかぎり、實在世界のそここに現に在り一般に感じられる道徳上の沈滞と衰微を少しも正すことができな

い。純粹法学と純粹国家学は、立法者の全能が極めて恐ろしい目的に乱用されるときでも、この全能に反対する論拠を示さないうし、あらゆる気ままに無批判に服従しなければならぬ。純粹社会経済学は、社会問題に対して全くなすすべを持たない。

このように、哲学は、一方では、認識問題をあなどつて不確実なまた当てにならない根底の上に不確実なまた当てにならない体系を建てたが、他方では、認識問題と取り組んで力を使ひつゝ、かつて歴史のなかで哲学におかれた最大の任務にとりかかることを怠っている。

何千年の間、人々は、全くひとから離れて独立に研究する個人を除いて、その形而上学上のまた倫理的な欲求を宗教でみたして来た。しかし、もう啓蒙時代から、各宗教の説得力は、目だつて弱つてきた。啓蒙時代には狭い精神上的の指導層において、しかし、だんだんに、それよりも広い社会の範囲で、そして、今日では、特に大都會では、もう大衆のなかで、そうなのである。今日その信仰のために野獣にその身を投げ与えたり、生きたいまつとなつて火刑にあつたりする者が果たしてどのくらいあるだろうか。しかし、これは別として——というのは、キリスト教徒の迫害でも殉教者は一般にごく少なかったから——誰が今日信仰のためだけに(einzig und allein)邪教徒迫害のために恐ろしい拷問具を案出したり、何年もの間、恐ろしい戦争をしたりするだろうか。どのくらいの人々が、今日、自分たちの宗教のために、述べる価値のある犠牲をそなえる気があるだろうか。何百万また何百万という人々が決して教会に行

かないし、行く人も、せいぜい、ひとびとが自分たちをそこで見るといふために行くのである。そして、洗礼、結婚式、葬式の場合の、因習的で自分たちにとって空虚になった儀式のためのはかには、教会を必要としない。

最近三百年の経験によると、宗教性が衰えまたくだされる過程がますます進む見込は、大きい。すべての社会の発展と同じように一時は強い反動があろうともそうなる。しかし、これに反して、今ある宗旨が古い信仰の火をまた吹き起こしたり、または新しい宗教が新しい力で創立されるという見込は、我々が見わたすことのできる限りでは、全くない。

それでは、我々はこれから、どの方向へ向って進むだろうか。ヴォルテールが、若し神がないならば、神を作らねばならぬ、と言ったときに、ヴォルテールはもう、文明と文化をおびやかす危険を見ていたのである。キリスト教の教義には説得力がないという理由でその幼年時代の信仰を見捨てた人々のなかの大多数は、哲学上の教育がなく、それ故に、形而上学的唯物論のとりことなってしまう。むしろ、これらの人々のなかの小部分だけが、このことをあからさまに認める勇氣と眞理愛とを持ってゐる。それよりも多い人々は、今までの信仰を持ってゐるふりをする。更にずっと多数の人々は、五パーセントの信仰と九五パーセントの不信仰との混合物のようなものを身につける。しかし、この場合でも、信仰のパーセントが次第に少なくなつて行くことは確実である。我々は、形而上学的唯物論がますます盛んになつて行く時代にゐる。しかし、この唯物論

は、倫理学を生長させることができない。それは、頭脳部分の物理運動を義務の根源と認めることはできないからである。すべてが物理原因と必然的で物理的な結果との連結ということになるからである。すなわち、いわゆる「強者の権利」(Recht des Stärkeren)だけとなる。それ故に、我々は、倫理的虚無主義へ、アナキーへ、動物の世界にあるような、残忍な、全く無拘束な暴力の支配へ、向って進むのである。

さて、カトリックのまた新教の牧師がする日曜の説教でも何のきき目もない多数の疑い深い人々に対して、牧師の代りに、ひとが、従来の哲学の重要な著作を手がかりとして、形而上学また倫理学について何か講演するとしよう。

講演者が空間とか時間とかは純粹な直観形式にすぎない、また、ひとは道徳上の義務を人間愛とか同情とかからでなく、道徳律そのもののために守らねばならない、と、僅かの時間、説明するかしないうちに、聞く人の一人はこっそり出て行くし、二人目の人は眠りこむし、三人目の人はもう話に注意せずに、自分の家計とか金のやりくりとかに思いをいたすだろう。そして、その次の講演には殆んど誰も席にいないだろう。

カントまたカントに依存するものすべてを問わないとして、ひとが、知識欲に燃えた人々を、古い神の証明、すなわち、幾何学的方法で証明された合理的倫理学で退屈させたり、神は全知全能であるからすべての罪に責任があるという神への非難を弁護したり、ライブニッツと共に、この世が、たとえ創造者の全知全能がどうあろうとも、可能な世界のなかで最も善いもの

であるといつて、この世の恐ろしい悲しみについて人々を慰めようとするならば、聞き手に對する効果は少しも前よりもよくならないだろう。

カントの後継者のうちの一人であるショーペンハウエルは、広い範圍でも、興味と同情並に隣人愛の氣高い感動とを呼び起し得るだろう。ドイッセンはショーペンハウエルを「あらゆる哲學者のなかで最もキリスト教的な哲學者」と呼んだ。しかし、この場合でも、空間と時間とが表象にすぎないと主張とか、ショーペンハウエルの数学に對するしくじった立場とかを問題としないでも、生に對する盲目的意思が全能であるにかかわらず、世界には苦しみまた退屈が支配し、最良なものとは破壊であるということになれば、世界の本質としての生に對する盲目的意思への信仰は、どのような説得力とどのような慰めとを与えるだろうか。講演会のベンチは、第二回のときにはからっぽではないだろうが、一〇回目の会または二〇回目の会にはからっぽになるだろう。そして、失敗であるということは、結局において、同じである。

多数の人を喜ばしたり楽しんだりする講演を立案することが哲學の任務でないことは、力説しすぎることはない。哲學が、人類にできるかぎり、真理を究明し、普遍妥当なものを教え、すべての國民と時代との精神上の基礎を作ろうとするならば、哲學は學問的でないべからぬ。そして、さし当って學問上の教養を受けた人々だけに訴えることができる。しかし、哲學が、宗教と同じように、一般の人々に適当な方法で近づき

やすくすることができ、大衆を唯物論から離し、精神的なものまた道徳的なものを畏敬するようにすることができるような成果を示すことができないなら、哲學はその重要な任務を解決したとはいえない。

今まで述べたことを見渡すと、我々は、哲學は今日までに火山の文獻を積み上げたけれども、まだ未解決の大きな問題に当面しており、それをどうして解決できるか検討し、そして、これを解決しようとしなければならぬという確信を持つことができる。

すべてをいっぺんに善くしようとすることは、一個人の力を果てしなく越すだろう。しかし、この任務が偉大でありまた神聖であることが、心の中でそうするように追いつたてられていると感じる人々をして、自分の果たし得る最上のものを寄与しようとすることを正当化するのである。

そこで、私はこの本を公にし、計画している著作全部を将来出版する第一歩とするのである。若し、この著作を完成することができたなら、それは、哲學の一千の体系と並んで一千一番目の体系となるだろう。今ここにこの書物は、それを吟味しなければ學問的な基礎のある實質哲學が独立して説明されないはずの、認識の重要問題を取扱うのである。この書物は、認識問題を軽んずる見方と、認識問題のうちに立ち往生する見方の中間に、正しい道を見いだそうとする。そのような次第であるから、この書物は、これだけで全く完結した全体である。この本は、ひとがこれからこれを哲學の方面でどのように発展さ

せるかということに関係なく存在する。また、私がこれを将来の著作で継続しそして完成できるかどうかとも関係なく存在する。

諸科学がますます専門化し文献がふえるので、一般哲学上の努力は世代の進むに従ってますます困難になる。その結果、哲学において誤謬におちいる危険が、個々の諸科学よりも遙かに大きいようになる。しかし、狭い科目をふくめてすべての部門で、学問の歴史は誤謬の歴史である、との命題が行なわれてい

る。そして、それにもかかわらず、自然科学と工学とは、沢山の誤謬を通して感嘆すべき業績に達した。そして、この業績はすべてが必ずしも誤謬ではなかったということを証明したのである。それ故に、学問と精神上の創作との全部門で誤謬を通して進歩することができないに違いない。

私がこの著作で誤りをおかせば、その誤りが将来の進歩に役立つものであってもらいたい。

(一橋大学講師)